

tab

No.
29

2
0
1
1
/ 09
/ 15

後藤美和子 / 木村和史 / 野村龍
福島敦子 / 石川和広 / 長尾高弘
水島英己 / 秋川久紫 / 倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

後藤美和子：みんな／01

野村龍：翡翠^{かわせみ}／02

長尾高弘：ちよつとの違い／04

福島敦子：爆笑Ⅱ／06

石川和広：証拠／07

秋川久紫：超獣詩篇／08

水島英己：ジャクソンビル・ブルース／09

倉田良成：星祭りの始まり・いずこともなく現れる騎馬について／11

文

木村和史：カップル／14

あとがき集／16

画：和田彰

〒第29号／2011年9月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230・0078横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp

Les monts sont allés

2011 ~~Am~~



後藤美和子

みんな

鳥も鳴かず

獣も後ろを振り向かなかつた

だってみんな、見ていたのだもの

紙ひこうきを飛ばした

みんな、手がちぎれるほどに

でも、くによくにやして

途中の田畑に落ちてしまった

鋼のドラも、拡声器の人の声も

消してしまった、リモコンで

四時になったから

カイトは空に昇らなかつた

それはすぐの裏山に

一人一人の髪の色に

ぴったり合って生えていたのに

(皆既蝕五九)

野村龍

かわせみ
翡翠

夏の終わり 螺旋階段を
降りてくる落ち着いた足音

蜩の音階を 追うようにして
滴り落ちる 洋梨の羽音

音がしないように 扉を閉めなさい
それから 髪飾りを静かに外して

抉り出したばかりの心臓を
香りのいい白金の杯に しっかりと沈めること

木菟の弓に矢をつがえ
今 ラベンダーを射貫く

《ここに火がともっている限り
水は開いて あなたを通す》

磨かれた風が
笑顔の唯一の翳りに しっかりと染み込む

午後が 深く息をつき
光は また一度傾く

泡立つ紫陽花の
波間に隠された 寺院の鐘が 巖かに溢れ

油を塗った 僧の歌も
やわらかな涙のようで

指先で交配を重ね

性格のいいぬくもりを作出する

ちよつとの違い

パンを食べるとパンくずが落ちる。

ごはんを食べると茶碗にねばねばがつく。

おかずのお皿には野菜の切れ端、鯉節のかけら、あまったソースがくつついている。

食べる前は、全部が大事な食べものだったのに、食べたあとは、一部がゴミや汚れになっている。

そう考え出すと、食べ残したゴミや汚れに、申し訳ないような気がして、

全部を食べものとして扱いたい、

ゴミや汚れになつてしまうものをなくしたい、と思う。

思っても、ゴミを出さないではいられないけど、ばかげてるかな？

ところが、あの日以来、

食べものにはちよつとだけ放射能が混ざっている。

混ざつてない食べものもあるかもしれないが、

混ざっている食べものも確実にある。

食べても大丈夫かもしれないけれども、

だめかもしれない。

混ざっていたら、

絶対大丈夫とは言えないだろう、やっぱり。

そう考え出すと、食べ残したゴミや汚れを見ても、

あまり申し訳ないと感じられなくなる。

まあいいや、と思うようになる。

そうやって何かがちよつとだけ失われる、

よ
う
な
気
が
す
る。
。

そ
ん
な
こ
と
を
気
に
し
て、
ば
か
げ
て
る
か
な
？

石川和広

証拠

生きているという手前

生きていることにたどり着く前に

腐りかけてた

生きはじめからマイナスやねん

ちよつと腐ってんのになぜか生きてんねん

だから俺いつも

相手に、正体バレないかなってビビってる

腐ってる身体と

紙くずみたいにくしゃくしゃつと折れ曲がって

開きにくい心が

不細工ちがうかなって

心を開いて伸ばそうと

引つ張って破けそうになり

ところどころ千切れた痕を濡らしながら

今日

抱く 町を抱く

頼りなく抱く

汚された大気を抱く

浮くことも浮かばれることもない

扇風機で走る飛行船

作り物のなつかしい町並み

作り物やな

俺ら、作り物やな

すべて腐り切る前に証拠残しとかなな

ちゃんと生きることができなかつたいう

証拠残しとかな

いけません

超獣詩篇

まさか麒麟の背中がこんなにも柔らかいなんて、想像すらしなかった。超獣だつて恋もするし、時には花火だつて打ち上げる。聖性と犍猛さが混交した護神の温もりに長く触れていると、魂が鎮められて次第に童化してゆくのが分かる。行く手には、喉元に刃を突き付けられるような難所がまだ幾らでもあるのだろう。かつて、嵐の季節に白象が啓示してくれたように、この世には愛すべき毒と唾棄すべき毒とがある。

ありふれた野望なら、ひと思いに手折つてしまおう。ナイーヴな懸想文なら、ただ賽の河原に送るだけだ。狡知な逸脱のスキームを考案する輩には、賞賛を浴びせて微笑みつつ梯子をはずしてしまふ。むしろ、巷にはびこる不覚悟者たちを制圧し、煌びやかな浄化の舞踏を見せてくれるなら、もはや黙つてひざまずくしかないだろう。

全てを数式や遺伝子の問題に還元するような仕掛けに寄り添うのは止めた方がいい。そこには血の通ったエロスなど有りはしないし、薄暗い詐術の森を抜け出すには腕の一本くらい失う覚悟が必要だ。いずれにせよ、淡い情愛など林檎と共に出荷してしまふに限るし、どんな理由があろうと、スキャットを軽んじるべきではないのだ。

人は小さな水たまりにすら溺れることがある。そして、位相の裂け目や不協和音の発生によって、事物の輪郭は容易に歪む。何よりも重要なのは、そこで狂気は何ら作用しないということ。怪しげなマジックミラーの向こうには一面の田園風景が広がっていて、オフィスピルの最上階の暗室には弥勒菩薩が閑かに横たわっている。やがてここにも、全ての欲望と闘争を統御する唐獅子がやって来る。ノックの音が合図だ。

水島英己

ジャクソンビル・ブルース

ランディングのバーで、ラム酒を飲む。長い長い午後と夜に体力で負けている。午後八時の無惨な明るさ、猿の日本人。永遠の有明の月がビルの上に輝く。フェリーが向こう岸へ渡る。

St Johns River に抱かれた町 Jacksonville。今日は Art Walk の夕べ、美術館は無料、HOWARD FINSTER という異色の画家の特別展覧会。街路では様々なジャンルの音楽が演奏され、ビール片手に踊る人。

a lizard がドアを開けるやいなや家にすっと入ってきた。「とかげ」が一匹。めでたい予兆だ。日本ではトカゲもいなくなる。住めなくなるのさ。ぼくらは小さくて、すばやい、奇妙に光る生物に魅了されている。

ジョン河の浅瀬を渡らされた牛たちのように、きみもぼくも乾いた日々の浅瀬を渡るのだ。至りついた交易の港で「小さなもの」たちに食われる肉になるために。

マリアンとダグラス。ダグラスは姉のマリアンの経営する派遣会社で働いている。ブラジルが大好きで、アメリカが大嫌いだ。54歳。26歳の娘に恋している。ブラジルにいる娘。秘密が秘密でなくなる輝きのなかに彼はいる。

われわれの生はすでにつねにそれ自体で "default" そのものではないか。しかし、私の不履行をきみが償えるわけがない、理由もない。しかし、それゆえ、きみと私がつがいになかに埋め込まれているのだ。

Jacksonville の本屋で Jack Kerouac の "BOOK OF BLUES" を見つけて買った。なかに、ORLANDA BLUES の 51 編がある（彼はフロリダで死んだんだ）。

ビートニクの音がなつかしく。" a little girls make shadow on the sidewalk shorter than the shadow of death in this town " 少女の小さな影にフロリダの光は勝つことはできない。死ぬ。

性の欲びも知らない間に、*its* 細胞を強いられる夏休みの少女たち。

slow で sad、緩慢で悲しい人間になりたい。松の大木にからまっているスペイン苔の白い髭。

「私も殺して」、未亡人は叫ぶ。この地上を去るのに信じる事が破られることなしに可能であった例はない。

熱ではなく冷やすこと、「そこで拒否して、感じないでいること。冷えていること。」をも冷やすこと。

この palm tree はクリスが生まれた時植えたもので、もう27年。屋根を越す高さ。大きな葉で日陰を作っている椰子の木の下でジョアンナはさらに上方を見上げるしぐさで語る。葉の隙間から光が漏れている。

別れと出会いは川床の下で凍ったまま流れを作ろうとしていた。河の彼岸に夢見た場所がある。海はカーニバル号のクルーズを待っていた。マグノリアの花が開き、地下や地上に埋められたものの腐敗の匂いがした。

樫の巨木のいく筋にも分かれた枝々をを同色の squirrel が自在に動き回る。注視を許すときもあるし、激しく拒否するときもある。保護色が燃えている沈黙の昼間。人の往来はない。孤独の音さえ途絶え、草原を滑空する土色のものの笑いが響く。

星祭りの始まり

ヤムタラの村々にも長い長い戦争の時代があった。わかものたちや壮齡のおとなたちはおびただしく幾死に返った。その発端といえばささいなことで、男が隣村の女を奪った、いやいやそうではない女の方から誘惑したのだとか、しなかつたのだとか、諸説あつたがとにかく双方の村の人間の逆鱗に触れた。第一の問題は、女が水の神に仕える存在であつたことで、彼女は必ずしも処女である必要はないが、違ふ村の男と通じることが固く禁じられていたのだ。男と女は男の側の集落に留め置かれた。その間、水神に仕える女は不在となる。これがきわめてややこしい問題を引き起こした。少なくとも水神のいます以上、これを闕所のような扱いにするわけにはゆかない。女をもとのような役割とするわけにも、勿論ゆかない。本当の争いはここからで、村々は最初からくすぶっていたおのが「水の女」の正統性を、それぞれに主張しはじめたのである。それぞれの村に「水の女」が擁立された。「水の女」による群雄割拠の様相を呈してきたのである。それぞれに特徴ある呪詞が「水の女」のものとして唱えられた。それぞれが靈力のあるものとされた。これらにより、相手の集落を拉ぐ呪詞（こひ）があるものとされた。戦争とは相手を傷つけ殺しさえするものだが、じっさいにはこうしたことも含めての戦いなのだといえる。槍で突かれて死ぬこと、呪詞によつて殺されることはまったく同じことなのである。こうして長い烈しい戦いがヤムタラ全土を覆つて展開した。当然のことながら国土は徐々に荒廢していった。マテ芋の収量は目に見えて減じていった。美しい火食鳥でさえ、羽を得るのでなく、肉を取るために人々の矢にかかった。こうしたなかで、「水の女」は次第にその存在の意義を失つていった。というより、村々は「水の女」のあまりの重さに堪ええなくなつていったのだ。戦争はつづいていたが、呪力も破壊力も失せはじめていて、戦線はのびきつていた。だれかがひとこと言い出しさえすれば良かった。けつきよく「水の女」は、もとの女の家系から移つて、男の側の姉妹の管掌するところとなつた。それで村々は、完全な解決ではないにせよ（しかしこのたぐいのことには完全な解決などありう

るのか)、戦いの矛先を納めた。干戈は熄んだのである。ところで、その後の男と女はどうしたか。長く離ればなれになっていた彼らが、再び相まみえることをえたのは老齢といえるほどの齢になってからだ。ふたりは仲睦まじい翁媪として余生を送るはずであった。「水の女」という苦患から逃れて、だが運命の不思議はふたりを運命それ自体から解放されたものとして許すことがなかった。ふたりは寂寥に満ちた無限の夜空の二点間に張り付けられ隔てられて、年に一度の逢瀬のほかは相会うことがない。思えば女は「水の女」であったのだ。運命はいかなる細部も見逃すことはない。そのおおもとは、やはり水神に仕えることの真の意味、すなわち犠牲たる神女としての刻印がまざまざとされるされている。

いずこともなく現れる騎馬について

ヤムタラの国々ではときどき不思議のことが興って、しかもそれについて誰も奇妙の思いを致さないことがしばしばであった。たとえばそれは影である。ずっとそこに寄り添っていると思っていたものが、ふいに影を亡くし日に曝されている。すべてがハイ・ヌーンであった時刻を知らされて、われわれは改めて当たり前のような顔つきでココナツの香り高い水を吸ったりしている。たとえばそれは高い声で鳴く極彩色の鳥である。われわれが注意深くしていればそれと分かるはずだが、鳥の中にじつはもうひとつの鳥がいて、声を出してふるえているのは鳥の皮を被った真の鳥なのである。このことの弁別は、われわれには比較的よくついていて、声を出さないほうの鳥はたちどころに重力という呪いに陥ってしまう。このことも白昼なにごとくもなかったかのように振る舞われる。夜よりもこうした白昼に同じようなことが現れる。最初、それはありふれた野原に過ぎない。おおく、その場所には標^{ヒシ}が張られる。見えないものを、まず見えるもので囲い込もうとするかのように。そうまで言わなくとも、見かけでは、子どもが罫を仕掛けるような稚拙なあやとりに似た幾つもの輪が仕掛けられる。それ以上でもそれ以下でもないが、だがそのせいかと思われるが、やがて一騎、三騎、五騎と、どこからともなく若い壮んな騎馬のものが出現し

て、あたりを駆けめぐりはじめる。いろとりどりの文様の紋章に綾取られながら、やがて十騎、二十騎、五十騎と増え続け、小鷹狩り、大鷹狩りの猛禽類の声もすさまじく、犬の叫び、銅鑼やホルンの猛々しいおらびを背景にして、百騎、千騎、万騎と野原に渦を巻く。刀杖のひびき、弓弦の弾奏される矢叫びに交じって、寄せ手と攻め手のわっという関の声のさなか、だがここが不思議に閑かな野原であることに不意に気づかされるのだ。じっさい、この野原自体、ヤムタラの荒野と広さを同じくしているが、海にまでつづく広さを持つものではない。千騎、万騎と兵馬は野原に充ち満ちているが、人もあふれず兵馬が小さいということもない。言ってみれば肅々と人馬は戦い続けている。馬の歯咬みや涎、人の顎砕く力はすさまじいが、それらは同時に非常に静謐なものでもあるのだ。気づくとふいにほどけているものがある。足許で輪の形に堅く結ばれた罫がほどけたのだ。あたりを見渡すと、そよぐものなにひとつとして無く、太陽は冲天に閑かに、そして一切は白日の夢となっていて、それがあつた痕跡は存在していない。すべては空しい夢であるが、こころみにまたふたたび標を結び直す。するとまた、どこからともなく馬の嘶き、滾る汗、野を満たす大軍勢が涌出する。こすれ合う金の輪にかがやき、鞆走る音、すばらしい血祭りの氣勢が上がり、若く壮んな流血の惨劇に、またいちいちの細部が最初から繰り返されるのである。一騎、十騎、百騎と出現し、玉兔の槍袞、猿の心臓、クラゲの青い血、また千騎、万騎と渦を巻いて、白く奔騰するように真昼の閑かさのなかで渦巻きつづける。

カツプル

昨年だったか一昨年だったか、その前の年だったか、材木置き場のようにも、ごみ置き場のようにも見えるわたしの敷地に、セキレイが遊びにきて、ひらひらひらひら舞っていたことがあった。

純白の白と漆黒の黒。ふたつの色が、生まれたてのように鮮やかで、柔らかくそうに見えた。

そして今年また、セキレイが遊びにきた。何年も見かけなかった気がするのは、わたしの身辺にいろいろなことが起こって留守がちだったので、セキレイとすれ違いになっていったのかもしれない。

ところが今年のセキレイは、わたしの記憶にあるセキレイと、印象がずいぶん違っていている。体が小さいし、黒と白も混濁した感じで、あの漆黒と純白をどこにも見つけることができな。違う種類のセキレイではないだろうから、わたしの目の老化が進んでいるせいがあるいは、風景を受け止める力になにか変化が生じているのではないかと思う。

セキレイの話は、なじみになった釧路の材木屋の土場の若者から、何度か聞かされていた。土場の材木の山にも、セキレイが巣をつくるらしい。

「かわいいんだよね」そう言つて顔をほころばせる屈強な若者も、どこか可愛らしい。材木の積み出しを任されている彼は、巣を刺激しないように気をつけながら、ときには巣ごと材木の山を移動させて、巣立ちのときまで見守るのだそうだ。

「土場のおばさんたちは、雛がいようがないしよすががかわわず、巣を捨ててしまうのさ」

わたしの所に材木の配達にきたおばさんが男性とふたりで、重たい束をトラックからぼんぼん投げ降ろしていた姿が目に見えかぶ。

「わたしのところにも巣を作るかも知れない」

と話したら、
「春と夏の二回巣をつくるから、今の時期は二度目だね」と教えてくれた。

期待というよりも半信半疑の気持のまま、遊びに来るセキレイを眺める日々が始まった。

最初の兆しは、藁一本だった。垂木など細身の古材を積んである山に、セキレイが出入りしているように見えたので覗いてみると、風に飛ばされてきた枯れ草みたいなのに、二本の藁が引つかかって垂れている。そんなところに藁があるのはたしかに不思議なのだが、それが藁なのかどうか判断できるような代物ではなかった。ところが藁は日に日に増えて、そこに巣が作られようとしているのは明らかだった。それでもまだ確信しきれなかったのは、その頃から、親の姿を見かけることがめつきり少なくなっていたからだ。わたしのところでの巣作りを諦めて、どこかよそに行ってしまったと思ったほどだ。

巣作りを始めると親は、巣のある周辺から気配を消そうとするのかも知れない。それを本能と呼ぶのかどうか分からないが、少なくとも愛情べったり、私情むき出しの行動とはちゃんと距離をとっていることになる。

巣は胸の高さにあって、古材の山の横を通り過ぎるときに、ちよつと屈むとすぐ目の前に見える。ただ、材の間に挟み込んである棧の高さが3センチほどしかないのです、巣の内部を覗くことはできない。土場の若者の話では、材木と材木のあいだに適当な隙間があって、しかも巣の底を受ける板かなにかがあるところを選ぶのだそうだ。わたしのところはさらに、雨よけのトタンもかぶっているのですが、条件は悪くないと判断してもらえたのだろう。それにしても、その巣はいつ完成して、いつ

産卵されるのか。

ある朝、いつものようにそっと覗いたら、藁の上に座り込んでいた親と、ぱったり目を合わせてしまった。驚いた親は、鋭い羽音をたてて飛び去って行った。

座りこんでいたということは、そこにすでに卵があるにちがいない。鉢合わせしてわたしもびっくりしたが、卵があると思うと、また少し胸がときめいた。

飛び立ったのは当然、母親だと思ったのだが、父親ということもありうる。いまだに父と母の見分けがつかないだけでなく、そもそもこの子育てに父と母が関わっているかどうかもある。巢作りの前に見かけていたセキレイが一羽だったか二羽だったか、それとも三羽だったか、あるいはもっと多くが交代でやってきていたのか、記憶が交錯してしまう。

あのときの賑わいと比べると、今はひっそりした緊張が漲っている。

卵を抱き始めていると分かってから、じかに覗くことをしないで、隣りの材木の山の隙間から離れて観察することにした。巢の上で親が座っていることはまれで、周辺にも姿をほとんど見かけないまま時間が過ぎた。

卵はいつ、孵るのだろうか。二週間以上、おそらく三週間ほどかかるのではないだろうか。さらに日が過ぎて、材木の上で脚を伸ばしたり、片方ずつ羽根を伸ばしたりする親の姿が目につくようになった。さすがに疲れ始めているようだ。そのようなときは安心して、周囲の気配にも無防備になっっているように見えた。

そしてあるとき、いきなり、藁の上にぼやぼやの産毛が見えた。その頃からまた、親が出入りする姿を頻繁に見かけるようになった。しかもはつきり、二羽のカップルだ。父と母の区別はいまだにつかないけれども、口に虫らしいものを啜えて、巢に直接にはなく、材木の山の端の方から入っていった。雛のところに辿り着くルートをとっている。

わたしが眺めていると、隙間にもぐり込む

のをためらい、引き返したりする。雛が腹を空かせているのに、餌やりの邪魔をしては申し訳ないので、なるべく見えないようにする。

雛の声も聞こえるようになった。三つだけ、頭が確認できた。大きく開けた口も。親の忙しさも尋常でなくなっているように見えた。息を切らしながらという感じで、餌運びをしている。

もしも母ひとり、あるいは父ひとりだったら、子育ては相当な重圧になるのではないだろうか。とくに相談し合っているわけでもなさそう。母と父の自然な協力によって、ぎりぎり子育てが完遂される。もしも片方の親の身になにかが起こったら、子育てはどうなるだろう。残された親がひとりで、子供たちを巢立たせるのだろうか。そのようなときのためのカップルとも考えられるけれども、自然がそんな計算までするとは思えない。

目の前の光景がとてもよくバランスがとれていて、そこから幾つもの物語を紡ぎ出せそうなほど豊穡に営まれていても、いったん何かが崩壊すると、その光景はたちどころに暗転する。片方の親になにか起きた場合、残された親がひとりで子供たちを育てあげるといふ物語は、あくまでも目の前の光景のなかでだけ創られる、限られた可能性に過ぎないかもしれないのだ。

母がガラスに襲われて餌食となり、父は驚いて遠くへ逃げ去り、雛は巢のなかで鳴き声をしだいに小さくさせ、ついには干からびてしまう。そのような物語の方が、起こり得る自然に近い気がする。

朝、屋根の上の騒がしい音で目がさめた。ふだんは聞こえない鳥の足音が、とととつと走り回っている。外に出ると、セキレイの雛らしい数羽と親たちだった。近所の空をこれみよがしに飛び回り、というより飛ぶ練習をしているらしく、トタン屋根や材木の上や電線に降りたって、にぎやかに啼いている。

「雛はまだ白と黒がはつきりしていなくて、灰色っぽい色をしてるんだ」

土場の若者が教えてくれたとおりでった。

confidence

映画『ふたりのヌーヴェルヴァーグ』を観に行った。オーディションでカメラが回る中、ぺらぺらと実によく口の回る一四歳のジャン・ピエール・レオーの映像が、エンディングにおまけのようにしていた。(後藤)

父の具合がよろしくない。意識障害を起こして一週間ほど入院したあと、認知症が進んでしまった。話ができるけれども、つじつまが合わなくなっている。これ以上悪化しないでいてくれるといいのだが。毎晩の電話で、なるべく普通の会話を試みる。母は元気。(木村)

認知症の貼り薬が出ました。さつそく父の背中に貼っています。他にも認知症の薬は新薬が出て、選んで使えるようになったのです。父のまぼろしが少し減りました。知らない人が訪ねてこなくなりました。お盆、留守にして帰宅すると、おお！ あつこが帰ってきた！ と喜んでくれました。思いがけずやってきた、ささやかな安らぎに、感動しています。(福島)

フロリダのジャクソンビルにいる。8月の終わりに娘の結婚式があるので、私たちは夫婦は1日から来て、とくに妻は娘とともに式の準備に余念がなかった。娘とその相手はすでに同居しているので、その家には私たちも世話になつていて。普段の生活とはいかないが、娘たちの心遣いのおかげで、それに近い日々をアメリカで送ることができた。妻は特に長年離れていた娘のために手伝いができるのが嬉しそうだった。明日(27日)が式なのだが、娘たちは川沿いのコロニアル風の美しい屋敷を会場として借り、その飾り付けや、式の進行などは自分たち、

友人たちでやるというスタイルである。日本標準的な式場任せの結婚式とは違って、これは文化祭風のノリの手作りだけに心のこもった式になるに違いない。でもプロに近いバンドも呼んだという。式場を借りるよりも高かったらしいと妻から聞いたが、予算のかけ所も違う。これが最大のイベントだが、私たち夫婦は12日から14日までバーモントのマルボロ音楽祭を、その60周年の記念すべき年に参加し聴くことができた、これもこの夏の忘れたい思い出になる。30日はここを出発する。帰るのがいやな、なにか怖い思いもするが、東京の日常に戻るのこそ人生の基本の習慣だと思いを定めるしかない。(2011年8月26日記・水島)

「PCオーディオ」に夢中です。切っ掛けは1冊のアスキー新書。それが1週間後には、MOOが4冊、新書が2冊。果たして「PCオーディオ」とは何なのか? 「44歳の夢」だけが膨らんでいきます。以下次号。(野村)

録音品質の悪さが若干気になるものの、内容自体はとても気に入っている小島麻由美のライヴアルバム『Songs For Gentlemen』の後半部分。十三、四曲目の「ろくでなし」と「あの娘の彼」を歌った後で、小島が「はい、A下さい！」とピアノに語りかけて「ラ音」のキーを叩いてもらい、「はい」と答えた一瞬後に「パパヤ、パパヤパパ」とスキヤットだけの名曲「ブレイガリー」を歌い出すところが堪らなく好きだ。その後、「あなたのその口唇、あなたのその黒い髪、あなたの熱い臉、そのままできて」という刺激的な歌詞の「セシルカットブルース」が歌われ、

「夜明けのスキヤット」の前奏が続く。馴染みのある「ルー、ルールー」という導入部に触れ、何度鳥肌を立てたことか。ジャズの影響から、時折変拍子の曲が含まれることや、歌詞のメッセージ性などよりも純粹に音楽性を重視して創られている彼女の楽曲の魅力に、この所ずっと参ってしまっている。(秋川)

歌舞伎座の代わりとして使われている新橋演舞場の8月花形歌舞伎、番組編成時には勘三郎が病氣療養中だったので大歌舞伎ではなくて花形歌舞伎になったが、その第三部を見に行った。三遊亭円朝原作の怪談乳房榎では、勘三郎の長男の勘太郎が四役早変わりを演じたが、とにかく勘太郎が勘三郎にそっくりだった。どうそっくりかという点、顔や体つきがそっくりな上に、四つの役の演じ分け方が、勘三郎があの手の役をやったらそうやるだろうと思うくらいにそっくりなのだ。この演目は勘三郎独自の演出もあって、勘三郎直伝で演じたのだろうとは思うが(ただし、私は勘三郎のこの演目は見えない)、少々遠目から見ていることもあって、まるでちよつと若い勘三郎がやっているように見えた。若いときの勘三郎は勘九郎だが、そういえば勘太郎も来年の今頃は勘九郎になっているはずなのである。歌舞伎の世襲は止められないんだろうなと思った。(長尾)

3・11の災害、原発事故ももう半年を迎えようとしている。お盆も過ぎ、時間が過ぎていく。ただ思うのは、この災害や事故の爪痕は僕が死んだ未来にも残るだろうこと、そしてその時間の大きさに追いついていけないこと。日本だけではない地球災害。しかし地球災害は同時に僕らの災害。批評家の加藤典洋が9・11テロの後『ポツカリあいた心の穴を少しずつ埋めて

いくんだ』という本を書いた。その題名は9・11だけでなく3・11を射抜いていると思う。実は「ポツカリあいた心の穴を少しずつ埋めていくんだ」という言葉は若くして亡くなったフィッツシュマンズのプロントマン佐藤伸治が書いた曲 POKKA POKKAの歌詞の一節。それを加藤は借りている。佐藤伸治は瞠目すべき曲や詩を書いた。その歌詞は一冊の本に集められていた記憶がある。こういう歌い手がオシャレな曲の中で時間と治癒の真実をさらりと解き明かしていたこと。覚えていたい。多くの方が知ったらもつと素晴らしい気がする。本当に核の事故には心を痛めるのだ。ぼっかり穴が開くのだ。そしてずっと人類は生きて死んでを繰り返して来たのだ。これらの時間のむごさとひろがりをもつとしっかりと感じていけたらと思う。(石川)

棚から無作為にCDをとってかけたらチェロが鳴った。しばらく陶然と聴きいつてしまった。Les mois sont alles は、二十世紀最大の音楽的パトロンだったパウルザッハーの70才の祝いに、ルチアーノベリオが贈ったチェロ独奏の曲『言葉は去ってしまった』。(和田)

障害の一級をこのほど取得した。主な障害は右半身の不自由によるもので、大元は十年前の、脳腫瘍を潰した折に発症した傷跡が、だんだん大きくなった末のことである。最初は傷もごく小さいものだったが、去年の秋くらいから膨らんで嚢胞を持つようになり、肢体不自由に繋がっていったというわけだ。だが好きな魚も食えるし、酒も弱くはなったが好きなだけ飲めるのだから、このまま正しい隠居生活を全うしようかと決意している。ただし、散歩に出られないのだけが小さな痛みなのだが。(倉田)